

## 明星大学における教育学系学生の卒業論文テーマの変遷 — 明星大学教育学研究紀要を用いて —

緒 賀 正 浩<sup>※1</sup>・桑 原 和 也<sup>※2</sup>

Changes in the graduation thesis's subjects of pedagogic students in Meisei University  
-Using the Bulletins of Science of Education Meisei University-

Masahiro Oga<sup>1</sup>・Kazuya Kuwabara<sup>2</sup>

キーワード：教員養成、卒業論文

Key word : Teacher training, Graduation thesis

### はじめに

教育学を専攻する学生の多くは、卒業研究として卒業論文を執筆して学位を取得する。明星大学もその例外ではなく、毎年、多くの卒業論文が生み出されている。これらの卒業論文の殆どは、学生の執筆指導に関する意義が重要であって、その内容については学術的にそれほど価値がないのかもしれない。しかし、それらの卒業論文を「史料」としてみた場合、そこには別の価値を見出すことが可能である<sup>1</sup>。即ち、教育学を専攻する学生の興味関心の移り変わりから逆照射する日本社会の教育的関心の推移や、少なくとも明星大学の教育学研究における不易等である。そこで、今回、著者らは明星大学の学生がこれまでに作成してきた論文の論題を整理することで、それらの実態を明らかにする事を試みる。

### 1 調査方法

本研究に際して用いた資料は、『明星大学教育学研究紀要』である。本紀要は、1986年から2010年まで25号刊行された後、明星大学の学部改編に伴って刊行終了となったものである。本紀要には、末尾に当時、心理・教育学科教育学専修という名称だった、教育学を専攻する学生の卒業論文論題一覧が掲載されている。今回、著者らはこの論題一覧を分析対象として扱う<sup>2</sup>。

### 2 卒業論文論題の概要

まず、1985年から2010年までの卒業論文論題の総数は3906題である。ただし、論題が全く同じ等、共同で作成したと思われるものも複数あるので、実際の総数はやや少なくなるとされる。なお、年度別に見た場合は、以下の通りである（表1）。

---

<sup>※1</sup> 明星大学 非常勤講師

<sup>※2</sup> 明星大学 非常勤講師

表1 年度別卒業論文論題数

1986 年	1987 年	1988 年	1989 年	1990 年	1991 年	1992 年
127	133	161	139	115	175	149
1993 年	1994 年	1995 年	1996 年	1997 年	1998 年	1999 年
142	165	184	179	198	167	143
2000 年	2001 年	2002 年	2003 年	2004 年	2005 年	2006 年
156	175	169	174	170	156	137
2007 年	2008 年	2009 年	2010 年			
142	148	151	151			

以上のように、概ね平均して 156 題程度の卒業論文が毎年生み出されていた事が判る。

次に、論題を幾つかの区分に従って分類してみたい。

### 3 論題の分類

まず、分類の基礎的作業として、ExcelTTM<sup>3</sup>を用いて頻出単語の抽出を行った結果が以下の通りである<sup>4</sup>。

表2 論文題目の分類

単語（上位9単語）	件数
家庭	273
学校	268
小学校	144
遊び	124
教師	87
障害児	75
児童	72
幼児	70
いじめ	68

\* 教育、子ども、考察、中心、研究、現状、課題、影響、現代、あり方（在り方）、役割といった、明らかに上位に来るがそれ自体で意味をなさないと思われる単語は抜いている。

以上を見てみると、意外な事に家庭を論題に入れたものが多い事が判る。無論、学校に関連する単語が、表中に限っても、「学校」、「小学校」、「教師」等とある為、家庭を扱った論文が最も多いというわけではない点には注意する必要がある。しかし、それでも学校教育ではなく、家庭、もしくは、家庭教育に着目したと思われる論題の多い事は、明星大学の教育学に特徴的な姿と言いうるかもしれない。

次に、これらの頻出単語及びその単語が時系列で見た場合には、どのように変化するのかを見てみたい（表3、図1、図2）。尚、図の作成については、上位5単語と下位4単語で分割している。

表 3 上位 9 単語の年度別出現件数

	家庭	学校	小学校	遊び	教師	障害児	児童	幼児	いじめ
1986 年	17	15	6	8	7	0	8	11	6
1987 年	13	20	9	11	6	5	5	8	4
1988 年	16	16	8	12	7	6	8	5	4
1989 年	11	16	9	7	10	2	4	2	1
1990 年	14	12	5	4	9	3	8	0	0
1991 年	24	16	11	6	11	8	10	3	2
1992 年	20	11	4	5	3	6	5	5	1
1993 年	11	17	6	4	5	9	5	3	3
1994 年	16	17	7	2	7	4	3	9	1
1995 年	17	27	3	6	1	7	7	8	1
1996 年	21	14	11	1	6	12	6	2	8
1997 年	22	30	7	8	1	11	5	11	9
1998 年	18	22	5	8	1	12	2	18	4
1999 年	17	12	5	2	2	6	3	13	7
2000 年	19	19	8	10	4	12	3	9	0
2001 年	7	27	11	1	5	8	14	6	4
2002 年	12	13	12	12	6	17	6	4	2
2003 年	9	15	16	6	6	8	11	8	4
2004 年	5	11	10	4	11	10	11	7	4
2005 年	8	15	6	7	2	3	7	8	0
2006 年	0	6	7	6	7	11	5	5	2
2007 年	2	12	7	5	2	13	5	5	4
2008 年	5	9	7	4	7	9	9	7	3
2009 年	8	4	15	3	3	13	14	3	6
2010 年	5	15	8	8	2	13	13	9	3

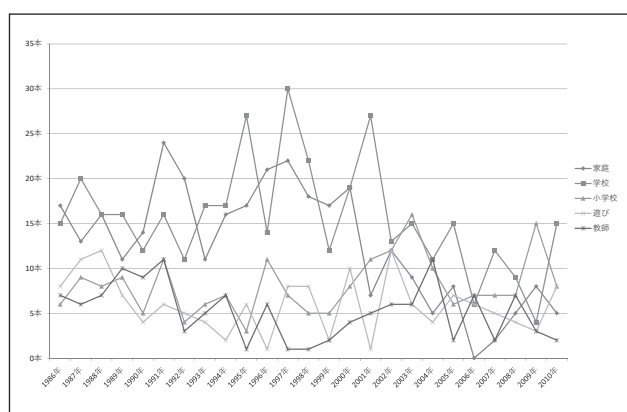


図 1 上位 5 単語を用いた論題数

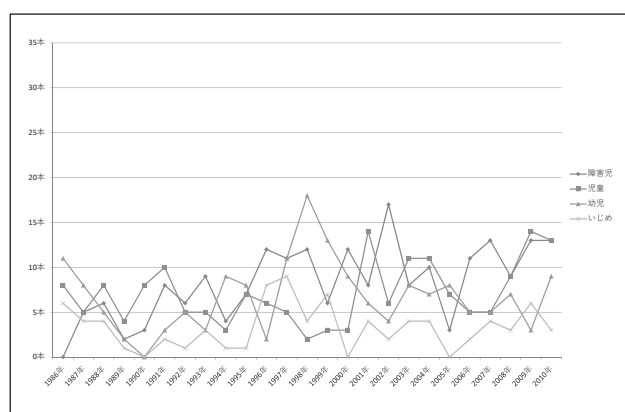


図 2 下位 4 単語を用いた論題数

以上の推移を見てみると、総数では頻出している単語であっても、時代によって波がある事も見えてくる。例えば、1990 年前後には多く見られた「家庭」というキーワードは 2000 年代に入ると大幅に減少している一方で、「幼児」が 1998 年前後に大きく突出している等である。こうした単語出現の波に関しては、先行研究が指摘するような指導

教員の研究指導<sup>5</sup>といった要因の他、教育学の場合は、社会的に話題になった教育問題などの影響を考慮する必要があるだろう。尚、ここに示したグラフはあくまで、その単語のみを抽出しているに過ぎない為、その単語に隣接している別の単語（例えば、「家庭」であれば、「家族」や「両親」等）を組み合わせた場合、論題の様相が大きく変わる可能性のある事を現時点においては留保する。

## おわりに

以上、明星大学における教育学系学生の卒業論文テーマの変遷について若干の検討を行った。先に記したように、卒業論文の多くはそれ自体の学術価値は低いものの、このように大規模にデータ化すれば、少なくとも教育学を専攻する学生の興味関心の移り変わりを見ることが出来るという点で、十分な学術価値を有すると筆者らは考える。また、今後、学生の論題選択の変遷から、例えば、社会的に話題とされた教育問題の影響を分析することや、あるいは、教育学やその他の最新の学術成果や教育の制度変更がどの程度のタイムラグで学生に浸透するかといった分析が出来るだろう。

しかし、今回はそれらの分析を行うことが出来ず、あくまでデータの概要と上記の分析が出来得るとする若干の示唆をするに留まらざるを得なかった。よって、筆者らは、今後、これらのデータを用いて、引き続きの分析検討を続けていく予定である。

## 註

- 1 管見の限り、教育学で学生の卒業論文を歴史的に分析した研究は見出せなかったが、他の学問領域では幾つか類似の研究を見出すことが出来た。例えば、山内健生「広島文理科大学動物学教室における卒業論文〈資料〉」『広島大学総合博物館研究報告』5号、2013、P.87-94. 高木修等、「学部学生の興味・関心から見た対人社会心理学研究の変遷—卒業研究のテーマ分析—」『関西大学社会学部紀要』42巻2号、2011、P.131-153.
- 2 尚、学部改編後教育学部となった現在、教育学部は『教育学研究紀要』を発行しているが、そこには卒業論文論題一覧が無い事、また、その他の媒体等でも卒業論文論題は無い為、教育学部に改編されて以降の卒業論文は分析対象にしていない。
- 3 ExcelTTMは、テキストマイニングの前処理を目的として、松村真宏と三浦麻子によって開発されたフリーウェアである。詳細は、<http://mtmr.jp/excelttm/>を参照。なお、本研究ではテキストマイニングまでは用いない。
- 4 尚、本表の作成に際しては、まず、キーワード、同義語、ストップワードの設定をせずに解析を行った後、明らかに意味を為さないと思われる頻出単語を除いて解析するという形式を採った。
- 5 註1に挙げた論文を参照の事。